

平成28年度「中学校学力向上対策支援事業」に係る

第1回中学校教科(数学科)指導力向上協議会

日時 平成28年6月1日(水) 13:30~16:35

会場 コンパルホール 多目的ホール

概要

1 開会行事

義務教育課長 米持 武彦

○2月に出した3つの提言

- ・学校の組織的な授業改善による「新大分スタンダード」の徹底
- ・学校規模に応じた教科指導力向上の仕組みの構築
- ・「生徒と共に創る授業」の推進

地域全体の指導力向上が求められている。

○教科の壁、指導法の壁も存在している。「タテ持ち」や合同の教科部会でそれを崩しこれまでの中学校の文化の流れを変えていく必要がある。

○生徒を中心に据えた授業を。授業の様子が振り返られるような目標を掲げ授業を変えていくことが求められる。

○学びに向かう力と思考力、判断力、表現力を身につけられる指導をお願いする。

2 講義 「思考力、判断力、表現力を育む数学教育について」

文部科学省 初等中等教育局 教育課程課 教科調査官

国立教育政策研究所 教育課程研究センター

研究開発部 教育課程調査官・学力調査官 水谷 尚人 氏

○最近の話題として

- ・子どもたちは、自分の考えを述べたり説明したりすることが課題である、自己肯定感や社会への参画意識が低い。だからこそ、社会の変化に主体的に向き合う力が求められる。経験することが必要と考える。
- ・深い学びの過程が実現できているか、対話的な学びの過程が実現できているか、主体的な学びが実現できているか、アクティブラーニングの視点から不断の授業改善が必要である。
- ・言語活動の重視など、学習活動の改善・充実に関する成果をふまえて取り組まなければならない。
- ・知識は定着ではなく、更新されていくものである。

○指導と評価の一体化

- ・全国調査の出題の趣旨や評価の観点など、「解説資料」を使って授業改善、指導に役立てて欲しい。
- ・どのように改善するか？生徒の学習状況を把握すること。「かけ算は増える、わり算は

減る」と理解したままの生徒は多い。つまづきの解消は授業で扱う必要がある。

○指導と評価の一体化を意識した指導案

- ・授業改善のための評価は日常的に行われることが重要で、生徒の状況を記録するための評価は、ある程度長い区切りの中で「おおむね満足できる」かを評価することが求められる。
- ・ノートなど授業後に確認できる方法と授業中の見取りを組み合わせ、生徒の特性にも配慮をする。
- ・評価については、指導に生かすという視点を一層重視する、効率的な評価で効率的な指導を、全国調査のアイデア例を是非活用して欲しい。

3 講義・演習

○茨城県大洗町立南中学校

- ・単元計画はA3、1枚である。「単元を通してめざす姿」を記載している。検証問題（全国調査の問題）、既習内容、生徒の実態等が書かれている。計画がしっかりしている。慣れれば書けるようになる。
- ・MRノート。授業のねらいに沿った課題を与え、家庭でも取り組む。授業でも既習内容の振り返りに活用できる。自分の力で既習を生かしながら考える力を育成することにつながる。
- ・授業での予想での間違いはOK。「わからない」や「これ合ってる?」「何で?」等が言える授業、人間関係ができています。めざす生徒の姿に迫っている。
- ・「連続する6個の6進数の和は?」の問いに対して、まず、「6進数」ということを共有していることが必要である。（課題の共有）
- ・隣の人と考え合いながら、「何となく説明してみたい。」「何となく聞いてみたい。」という姿は言語活動が充実している姿と言えるのではないかと。
- ・試行錯誤をする中で、規則性を見つけるという経験はとても大事である。
- ・授業作りで意識したいこと、「将来必要とする力」「それを身につけさせる言語活動の充実」「学習内容の価値の実感」「自律、知識を得る・活用できる・新しいことに踏み出せる」先生がいなくても数学の勉強ができるように。

所感

- 単元計画がしっかりしていることが大前提で、生徒が主体の授業を進めるという意思が必要である。
- 校内研修や部会の中で教師自身が、アクティブ・ラーニングを用いた授業の楽しさを実感できると授業改善はさらに進むと考えられる。

(文責: 義務教育課 担当: 日田教育事務所 小畑)